KPU NEWS

No. 176
Jan. 2014

京都薬科大学
KPU NEWS 編集委員会

新年のご挨拶“創立130周年に向けて”

理事長　武田 禮二

新年あけましておめでとうございます。

皆様方には新たな気持ちで2014年を迎えられた事と思います。

昨年は、民主党政権から自民党政権に代わり、安倍政権による経済政策、アベノミクス効果の結果、円安や株高等が進み、日本経済もようやくデフレ社会からの脱却に向けて歩み始めた年になりました。また、2020年のオリンピックが東京で開催されることも決まり、明るい未来を予感させる出来事も芽生えてきました。

反面、昨年も多くの違反事例、例えば大学での研究費不正使用、医療業界でのN社による臨床データの不正、柔道界のハラスメント事件やJR北海道の不祥事等が大きく報道され、改めてコンプライアンスの重要性を認識させられました。世の中ではグローバル化が進み、盛んにコンプライアンスの重要性が叫ばれています。コンプライアンスとは“法令遵守”と一般的に日本では訳されていますが、それに加えて“倫理や社会貢献などに配慮し、変わりゆく社会からの要請を常に捉えながら行動する”と言う意味も含まれています。大学構内や日常生活等で法令・規則を守るのは当たり前ですし、「誰も見ていない」、「皆がやっている」、あるいは「昔からやっている」から“ルールを守らなくていい”等は通用しません。実際に法令や規則違反が起こらないようにするために必要な事は、日頃の行動の中で問題を未然に防ぐ努力をすることです。問題が起こっている、あるいは起こりそうであるなら、指導教員や上司にすぐに報告や相談をしてください。そのためには常に高い倫理観や使命感を持って、社会の常識（社会的良識）に従って自由の中にも節度を持って行動する事が大切です。医療に従事する者は薬に関する高い知識の蓄積と共に他人（患者さん）を思いやり、他人(患者さん)の目線や立場に立って物事を考え、対応することが重要です。在学中に倫理観や使命感を育んでいただき、社会に出た時に京都薬科大学の人は何か違うと言われるようになってください。勿論、全職員は大学人・社会人として学生に範を示すためにも常に高い倫理観や使命感を持って、社会的良識に従って行動しなければなりません。

本学は今年の4月15日に創立130周年を迎えます。

CONTENTS

新年のご挨拶　理事長 武田 禮二 …… 1～2
年頭のご挨拶　学長 乾 賢一 …… 2
昇任のご挨拶 …… 3～4
卒業生からのメッセージ …… 4
特集 私の薦める、私の一冊 …… 5～8
マレーシア学会発表と短期語学研修 …… 9～11
異文化体験 …… 12～14
Library News …… 14
2013年11月のオープンキャンパス開催 …… 15
2014年度推薦入学試験結果 …… 15
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
キックオフシンポジウム実施報告 16～17
第99回薬剤師国家試験 …… 17
教育後援会からのお知らせ …… 18
学生相談室だより …… 19
2013年度京薬祭を終えて …… 20
クラブだより …… 21～22
2013年度後期試験等日程 …… 23
2014年度 卒後教育講座 概要 …… 24
第19回京都薬科大学公開講座報告 …… 25
受賞・掲載 …… 25～27
お知らせ …… 27
京薬会だより …… 28
京都薬科大学寄附金芳名録 …… 28

1884（明治17）年に本学の前身である私立京都独逸学校が設立され、私立京都薬学校、京都薬学専門学校を経て現在に至っています。本学の建学の精神は“フィロソフィア・エト・プラクティコス”で「愛学躬行」と訳され、その意味は言ったことは必ずやり遂げる、即ち有言実行と言う事です。このような節目の年に当たり、もう一度原点に立ち返り、学生・職員が一丸となって“ナンバーワン”の大学を目指しましょう。

皆様にとって本年が良い年である事を祈念します。

年頭のご挨拶 ～10年後の薬学・薬剤師を見据えて～

学長　乾 賢一

新年あけましておめでとうございます。皆様それぞれに新たな希望や夢を抱いて良い年をお迎えになられたことと存じます。学長の任期がいよいよ最終年を迎えていましたが、昨年8月の再任選挙で皆様のご支持をいただき、9月の理事会で再任が承認されました。4年間の歩みを振り返りながら、今後の展望について私見を述べたいと思います。

「愛学躬行」を建学の精神として築き上げられてきた歴史と伝統、6年制薬学に特化した教育改革など、京都薬科大学の状況を十分理解しないままに、教員、事務職員を前に所信表明の講演をさせていただいたことが懐かしく思い出されます。激変する大学病院において、私自身が思い描き、苦しみながら培ってきた薬学、薬剤師像を、包み隠さず述べさせていただきました。すなわち6年制薬学の原点は、Science(科学)、Art(技術)、Humanity(人間性)のバランスのとれた教育の実践にあること、そして本学の目指すところは「ナンバーワンの薬学教育と研究」、「ファーマシスト・サイエンティストの育成」であることを皆さんに訴えました。この4年の間に、私の熱い思いは本学の皆さんに徐々に受け入れられてきたことを実感しています。混沌とする日本の薬学教育改革の中で、本学では構成員が一丸となって教育改革に取り組み、薬系大学の先頭に立って特徴ある教育・研究活動を展開してきました。6年制教育が一巡したところでいち早くカリキュラム改革が行われ、本学の特徴が一層明確になりました。一方、研究については、新しい6年制薬学の下で本学独自の活力ある研究活動を目指してきました。分野配属した学生の研究活動を充実させるために、分野間の共同研究の推進、他大学との交流協定の活用、優秀研究賞の制定など、これまでの既成概念を越えた取り組みが進んでいます。とりわけ、昨年から実施した英語による6年次生の卒論発表会（ポスター発表）は、他大学にもインパクトを与えているようであります。このように本学の6年制薬学教育は、従来の修士課程を越える人材を育成する場になりうると私は信じています。

学部教育とならび、重視しているのが大学院教育です。6年制薬学部の上に立つ4年制博士課程は、大学、医療現場、製薬企業における将来の指導者（博士号を持った薬剤師）育成という点で極めて重要であります。2012年に4年制博士課程（定員10名）を設置し、「基礎薬学コース」、「臨床薬学コース」を設けるとともに、医学系大学と連携してがん研究に特化した「がんプロコース」、医薬品医療機器総合機構(PMDA)と連携した「レギュラトリーサイエンスプログラム」を設けて、時代の先端をゆく基礎薬学、臨床薬学の研究者を養成すると共に、これまでの研究実績を基盤に独創的な研究の展開を目指しています。本学の新しい4年制博士課程は、国立大学の薬学研究科にも勝る勢いの規模と内容の大学院になりうると自負しています。加えて、若手教員の活躍が目覚ましく、現在2名の助教が海外留学中であり、また国際学会等での発表件数も着実に増加しています。このようなグローバルな研究活動は、大学からの支援策が功を奏しており、若手教員の研究力向上につながっていると思います。

6年制教育改革に伴って、本学では学舎・研究棟の新築、中央庭園、バイオサイエンス研究センター等、すばらしい教育・研究環境が整いました。また、総力を結集して第二期中期計画が策定され、現在アクションプランが着実に実行されています。今後は、薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に伴う更なる改革、大学院博士課程の充実、国際交流の推進、本学が持つ知的資源を集約した製薬産業界との連携強化など、重要な課題が山積しています。本学の皆さんにとって、夢のある活力ある大学運営を目指すとともに、卒業生との連携を一層深めながら、10年後の薬学・薬剤師を見据えた大学運営を推進したいと考えています。本学は、今年4月に創立130周年という節目を迎えます。KPUの皆さん、「矜持（きょうじ）と責任」、「Be Ambitious」のキーワードを胸に秘めながら、次の10年に向けて力強く前進しようではありませんか。

最後に皆様のご多幸、ご活躍を祈念し、新年の挨拶とさせていただきます。

昇任のご挨拶

薬学教育系
教育研究総合センター
薬学教育研究センター
教授　細井 信造

10月1日付で、薬学教育研究センターの教授に就任いたしました。

2009年に本学に戻る機会を与えて頂いて以来、センターの教員全員で力を合わせて国家試験対策を軌道にのせるべく様々な取り組みを実施してまいりました。その結果、6年制薬剤師国家試験において、2年続けて新卒国試合格率97%以上となっております。これもひとえに教育職員および事務職員が一体となり、しっかりとした協力関係を構築できたからと改めて感謝申し上げます。さて、薬学部は、ただ資格を取得させればよいというものではなく、人間性豊かな、知識・技能・態度のバランスのとれた薬剤師（研究マインドを持った）として社会に送り出すその責務を負っています。薬学部は薬剤師の予備校ではありません。

問題に直面したときに、その解決方法を即座に考え、適切に行動に移すことができるように教育することは大学の重要な使命でありますが、資格を当たり前のように取得できるように指導しなければならないのも事実です。薬学部の評価が得てして、国家試験の合格率のみに目が向けられがちですが、付け焼刃の教育ではなく、真の実力を醸成する対策・方法論も評価されるべきと考えます。今後、益々大学の教育力が問われるようになるでしょう。学部学生の皆さんは将来の目標をしっかりと定め、それに向かってまい進して下さい。微力ではありますが、その後押しをさせて頂きます。

ところで大学において、教育と研究は車の両輪のようなものであり、何れかに大きく偏っても良くありません。第98回薬剤師国家試験では、実験データに基づいて考えさせる問題が出題されました。このことから薬剤師の資格試験という枠を超え、研究を通して学ぶべきことがたくさんあり、それは薬剤師にとっても必要であると改めて感じました。教育と研究のバランスをうまくとることこそ、大学（そして個々の教員）が生き残っていく上での鍵となるのではないでしょうか。

今後はこれまで行ってきた取り組みを基本線とし、状況および結果を見ながら臨機応変に対策を修正し、引き続いて分野・センターの先生方および事務の方々とうまく連携をとりながら、本学に少しでも貢献できるよう尽力したいと思います。今後とも宜しくお願いいたします。

創薬科学系
生薬学分野
准教授　中村 誠宏

平成25年10月1日付で生薬学分野の准教授に昇進させて頂きました。

私は平成10年に本学を卒業し、太田俊作教授（現 名誉教授）、山下正行助教授（現 教授）、川崎郁勇助手（現 武庫川女子大薬学部教授）［機能分子化学教室（現 薬品製造学分野）］のご指導の下、平成12年に本学修士課程、平成15年に博士課程を修了致しました。その後、平成15年より2年間米国ノースカロライナ大学（Kuo-Hsiung Lee 教授）にて博士研究員として研究を行う機会に恵まれました。平成17年に本学生薬学分野の助手として着任し、平成19年からは助教として吉川雅之教授（現 名誉教授）、松田久司准教授（現 教授）のご指導・ご薫陶を賜り、教育・研究に取り組んでまいりました。

これまでに「伝承薬効の解明を基盤とした天然薬物の有効成分の解明研究」や「メディシナルフラワー（薬用花）および薬用食品を素材とした生体機能性成分の探索研究」を主な研究テーマとして掲げ、天然薬物や薬用食品から化合物の単離、構造決定を中心とし研究に従事させて頂きました。天然物の中から有効成分を単離することはとにかく忍耐強く繰り返しの作業を行う必要がありますが、有効成分を取り出し学生とともに討論しながら構造を決定した際は大変な感動があります。学生と感動や苦難を共有することは私にとって生き甲斐でもあります。今後も、学生とともに切磋琢磨し社会貢献できるような研究を進めていきたいと思っております。また、学生には受け身となるような技術・知識のみを教えるのではなく、学生の探究心を引き出し教員や仲間と討論できる人材を育成していきたいと考えております。

ところで、生薬学・天然物化学は薬学部独自の講義科目であります。また、医療現場で利用されている医薬品の多くが天然物由来の化合物であり、現在、日本では医師の9割が漢方薬を処方するという調査結果があります。このことを肝に銘じて、学生が将来、得た知識を実際の医療現場で活用でき、薬剤師の漢方薬を含めた医薬品の的確な服薬指導に繋がるよう生薬学・漢方医薬学関連科目の講義を行っていきたいと考えております。

微力ではありますが、本学の更なる発展に貢献できるよう一意専心努力する所存でございます。今後とも皆様方のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

病態薬科学系
薬物治療学分野
講師　天ヶ瀬 紀久子

このたび、2013年10月１日付で薬物治療学分野の講師に昇任させて頂きました。私は1993年本学薬学科を卒業、1995年本学大学院博士前期（修士）課程を修了後、同年に本学応用薬理学教室の助手としてご採用いただき、教育・研究活動に携わるとともに、元教室主任の岡部進教授（本学名誉教授）のご指導の下、博士（薬学）号を取得させて頂きました。2004年薬物治療学分野との統合により、元分野主任の竹内孝治教授（本学名誉教授）のご指導の下で助手、助教として、大学院生および学部学生の教育・研究の指導にあたってまいりました。2013年4月からは同薬物治療学分野にて加藤伸一教授の下、「消化管傷害の予防および治癒に関する研究」をテーマとし、既知の消化管疾患はもちろんのこと、現在問題となっている薬剤起因性消化管傷害に対し、その予防と新たな薬物治療法の提案ができるよう、分野配属の学部学生と共に研究を進めています。講義では「薬物治療学A・E」、「先端病態科学概論」、「薬理学実習」、「早期体験学習」の一部を担当させていただいております。学生がCBT、OSCEそして国家試験に最終的に対応し得る知識を習得できるように、最新の知見を交えた教育内容とすることで、様々な分野に興味を広げられるように指導していきたいと考えています。

6年制薬学部卒業後の進路はこれまで以上に幅広く、基礎から臨床まで、様々な角度から医療に携わる可能性が広がっています。京都薬科大学卒業生が、これまで以上に病院・薬局で薬剤師として活躍するのはもちろんのこと、製薬企業における研究・臨床開発・学術・営業職ならびに行政職等、薬学界においてトップクラスの医療人として社会に貢献できるよう、その基礎教育に精進・努力していく所存でございます。皆様方には今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

卒業生からのメッセージ

医薬品の品質や有効性・安全性を支える

伊賀（みずさ）　瑞紗

2012年　学部卒業
（代謝分析学分野）

医薬品医療機器
レギュラトリーサイエンス財団
標準品事業部
化学薬品標準品課

私は本学を卒業後、薬学関連の財団法人で分析関係の仕事をしています。私の財団では日本薬局方(日局)という医薬品の規格基準書に収載されている「日局標準品」を製造・頒布しているため、皆さんが想像するような製薬企業での仕事とは少し違っているかもしれません。

日本で販売される医薬品は有効性や安全性が確保されるように、性状や品質が日局の規格基準に適合すること、と薬事法で定められています。私達が頒布している日局標準品とは、原薬や製剤の品質を日局に従って試験する時に比較対照として使用する標準物質です。標準品原料を様々な分析機器で分析・解析して、日局標準品として頒布して良いかを試験しています。医薬品の開発や再審査、ジェネリック医薬品の品質チェックなど幅広い分野で使用されるため、日局標準品を頒布する事は医薬品の有効性・安全性に直結する責任ある仕事だと思っています。

日局標準品は医薬品の品質を確保するための基準物質ですから、薬事法と密接な関係にあります。法律というと苦手意識のある方が多いと思いますし、私も学生の頃は薬理や病態科目にばかり目が行って、薬事法規は二の次にしていました。しかし、医薬品の研究開発や製造工程における品質や有効性・安全性を確保するための重要な基準ですので、皆さんにはこの機会に興味を持って頂けたら幸いです。

さて、皆さんは「レギュラトリーサイエンス」という言葉を聞いたことはありますか。私の財団の名称にもなっていますが、実は私も就職するまでほとんど聞いた事のない言葉でした。

レギュラトリーサイエンスとは、限りなく発展していく科学技術を評価するための科学という考え方です。例えば新しい医薬品を開発した時、従来の方法で評価する事で有効性・安全性が保証できるとは限りません。また、従来の医薬品でも違う方法で作られた原薬の品質は今までの医薬品と同じでしょうか。昔は分析できなかったものが技術の向上によって測定できるようになる場合もあります。

医薬品を開発・評価するための基準は時代と共に変化していきます。基準を整備する事により品質や有効性・安全性を正しく評価し、研究開発の促進や品質管理の向上に繋げていく、ヒトと科学技術を調和していく手段として注目されています。最近では薬学系の雑誌等でよく取り上げられているので、興味のある方はぜひ調べてみて下さい。

特 集

私の薦める、私の一冊

「読書の秋」というのには、あまりにも短すぎた今年の秋、ならば、「読書の冬」と洒落てみましょう！そんなわけで、教員のみなさん＋図書館の方にお薦めの本を紹介していただきました。銘打って「私の薦める、私の一冊」。1冊に止まらず、複数冊ご推薦いただいたものもあります。お忙しいなか編集委員会の求めに応じていただいたみなさんには心より感謝申しあげます。

若い人たち、しかも大学生の読書離れが指摘されてすでに久しくなっています。さらにこのところ、いたるところで携帯・スマホの操作に夢中になっている人たちを見ると、この先どんな社会になっていくのかと、ふとそんな不安な気持ちがすることもあります。そうしたせいか、駅で、車内で、あるいは図書館で、静かに本を開いている人を見つけると、ホッとします。

本との出会いは、人との出会いに優るとも劣らないと言います。若い頃の様々な書物との出会いは、その後の人生に深みと奥行きを与えてくれるはずです。あえて「良き本」に出会えとは言いません。「悪友」同様に「悪き本」も読みようによっては、何がしかを与えてくれることもあります。むしろそうした価値判断ができる自分自身をつくりあげていく手だてとなるばあいもあります。

若い頃に読んだ本を思い出すと、不思議なことに、その頃の自分の心の風景、人間関係、時代状況などと複雑に絡み合いつつ思い出されてきます。これもまた読書の効用と言うべきでしょうか。

近年は、電子書籍も普及しはじめ、読書の形態も多様化しつつありますが、個人的にはやはり紙の本が捨てがたい思いです。とはいえ、みなさんには、電子書籍であろうと「紙書籍」であろうと、ぜひとも書物の大海に乗り出してほしいと思います。そのための手がかりとして、この特集が役立つことを願っています。読書という体験をこれからの人生の糧に、そして貴重な想い出にしてみてください！

なお、この特集でご推薦いただいた本については、図書館にまとめて置くコーナーを設けていただくことを考えております。また、次号以降の本誌上にも、推薦書欄を設けていきたいと考えておりますのでご期待ください。

KPU$_{NEWS}$編集委員長　鈴木 栄樹

薬品化学分野　教授　赤路 健一

「ヒトは見たいものしか見ないし、聞きたいことしか聞かない」。最初にこう言ったのが誰かは知らないが、少なくともカエサルはこれと同じ内容の一文を残しているそうである。ローマの帝政が始まる直前である。その後ゆうに千年以上忘れられていたそうだが、これを再発見したのがマキャヴェッリだそうである。いわゆるルネッサンスのころである。中世のキリスト教徒はこの言葉を聴きたくなかったようである。

「これだけは見たい、これは聞いておきたい」という気があまりないせいか、これまで読んだ本でこの一冊というのは正直、無い。でも読んだことが残っているのはどうやら古い本や古いことを書いた本が多いようである。もちろん文章を覚えているわけでも、有名なさわりを覚えているわけでもない。“このときあの人はこうした、こうなった”というようなことがおぼろげに残っている。文明は驚異的に進んだが、人間の本質はあまり変わっていないように思う。

ありがたいことに今の時代、欲するものは何でも手に入る（ようである）。それでも時間を買うのは難しい。時代にマッチしたベストセラーを否定する気はさらさらないが、今に残る古典にはあらゆるものが詰まっている。受験勉強を終わらせ、世の現実にさらされるまでのかけがえのないこの時期、昔の本を読むのも悪くない。大学を出て10年、20年たてば納得できることが書いてある（ように思う）。声高に教養主義を主張する気はないが、時の試練に耐えた本質だけが現実の対処に役立つのではないか。

どんな分野でもかまわない。世に言う古典を読み散らかせば「見えなかったものが見え、聞けなかったことが聞ける」（だろう、たぶん）。自らの乏しい経験を補うのはこれが一番ではなかったかと今になって後悔している。

（参考までに、カエサルは『ガリア戦記』（岩波文庫、講談社学術文庫）、マキャヴェッリは『君主論』（岩波文庫、中公文庫BIBLIO）という本を書いている）

病態生理学分野　教授　芦原 英司

マイケル・サンデル著 『ハーバード白熱教室講義録＋東大特別講義録』上・下 早川書房 2012年

「哲学者」とよばれる多くの先達たちは、それぞ

れの考え方を「哲学」という学問として体系づけている。「哲学」と聞くだけで難解で取っつきにくい学問、頭の固い超越した学者のみが楽しむ趣味のような学問と考えがちであるであるが、実はそうではなく、哲学とは日常の生活・行動の根拠を示した学問で、私たちは何かトラブルに遭遇したとき、正に先達たちが体系づけた「哲学」的思想に基づいた行動で対処している。このことをマイケル・サンデル教授は、身近な、時に極端なテーマで学生たちに問題提起し、議論させ気づかせている。その講義内容をまとめたものが「ハーバード白熱教室講義録」である。この講義風景はNHKテレビで取り上げられていたので、多くの学生諸君はご存じのことと思われるが、一度文字を通して臨場感あふれる講義風景を楽しんでみてはいかがだろうか。

君たちは、薬剤師国家試験に合格後、薬剤師免許を取得し社会に羽ばたいていき、社会の中で様々な人とコミュニケーションを取り仕事をしていくが、学生時代に教わった基本的なコミュニケーション術では十分な人間関係は成り立たず、コミュニケーションの取り方の難しさや大切さを改めて感じるはずである。大切なことは、人それぞれ考え方や生き方には違いがあり、この社会は“多様な”人間の集合体であるということを認識し、個々人の考え方を尊重して付き合っていくことである。マイケル・サンデル教授の白熱講義に参加し、サンデル教授の提起した問題を自分たちでも考え、また君たちと同年代の学生たちの考え方を感じるとともに、「人間の多様性」を感じてもらいたい。

社会は様々な考えを持つ様々な人間の集合体である。多様な人間一人一人を尊重し、付き合っていくことで人間関係を構築し、一人前の社会人・薬剤師として成長していただきたい。

微生物・感染制御学分野　教授　後藤 直正

開高健著 『輝ける闇』 新潮文庫 1982年、『夏の闇』 新潮文庫 1983年
～ 入ってきて人生と叫び、出て行って死と叫ぶ ～

1960年代後半、私の高校生のころのTVニュースの多くが、南北ベトナム間の戦争の報道から始まった。ナパーム弾が落下し、寒村を兵士が焼き尽くす。ゲリラ兵士が地面の小穴を出入りする、人々は泣き、訴え、逃げまどう。今年8月に来日したオリバー・ストーン監督が兵士としての実体験にもとづいて製作した映画「プラトーン」（1986年公開）をモノクロで観ていたようなものであり、いまとなっては高校時代への郷愁をともなう。

『輝ける闇』（1968）は、開高健が朝日新聞臨時特派員としてベトナム共和国（南ベトナム）軍に従軍し、最前線で突如始まった戦闘で九死に一生を得た経験をもとに、生と性への執着、脈絡もなく訪れる死を描き切った小説である。サントリー宣伝部員として、名コピー「「人間」らしくやりたいナ」を生み出し、『裸の王様』（1957）で芥川賞を受賞した開高健の博識・豪筆による描写から、全ページにベトナムの湿熱の漂いが感じられる。

戦場で瞬時に来たる死の恐怖は、生の儚さを覚醒させ、『夏の闇』（1972）の「私」を終日惰眠に浸る虚無、鬱状態に陥らせている。死に近い惰眠と生のための食事以外は、「女」との乾燥した性に埋没させる。偶然に接した「ベトナム戦争の終焉近し」の報道によって、「私」は覚醒し、虚無の日々を捨てて、熟れきった暑熱のベトナムにふたたび行くことを決意する。覚醒した身には、惰眠、食事、性も、纏わりつく惰性となる。それを振り払う決意が芽生え、胎動が起こりつつある「私」の姿を、「入ってきて人生と叫び、出て行って死と叫んだ」という突然の挿入で表現している。一点に意識が収束し、禅的悟りの炎を生じさせる。圧巻である。

高校生のころに初めて読んだときの感慨がどのようなものかは忘却の彼方、今は連続した2作品によって、ベトナム戦争、東西ドイツを借景に、生、性、死を描いていると感じる。古い作品となってしまったかもしれないが、「人間らしくとは」、また「生とは」、を表現した傑作であると思うとともに、文学は音楽とは異なる、絵画とも異なる、科学の彼岸にある芸術であるということを改めて知らされる。

臨床薬学分野　教授　西口 工司

百田尚樹著 『永遠の0（ゼロ）』 講談社 2009年

約2年前の出張の折、新幹線に飛び乗る直前、タイトルに惹かれて何気なく購入した一冊です。ところが、読み進めると心を洗われるような感動と素晴らしい人間に出逢えた気持ちになれる一冊であり、あっという間に読み終えてしまいました。是非、一読されることをお勧めしたいと思います。なお、映画化されて、2013年末にロードショーとなりました。さらに余談ですが、百田尚樹氏は、テレビ番組「探偵ナイトスクープ」を企画する放送作家としても活躍されているようです。

まず、「永遠の0」の「0」とは？太平洋戦争で活躍した海軍零式戦闘機「零戦」のことです。いまや太平洋戦争で日本が敗れたことすら知らない方のいる世代に「零戦」といってもピンとこないかもしれ

ません。しかし、戦争や零戦を知らない方でも、この物語による素晴らしい感動が心を包むことは間違いないと思います。また、なまじの歴史本などより、興味深く戦争の経緯とその実態を教えてくれる点でも実に優れた作品だと思います。

次に、肝心な物語の内容についてです。4年連続で司法試験に落ちて人生の目標を失いかけている26歳の佐伯健太郎と、仕事と結婚の狭間で人生の岐路に立つフリーライターの慶子（姉）が、太平洋戦争で戦死した宮部久蔵（祖父）のことを調べはじめるところから物語が動き出します。物語は宮部久蔵の謎の人物像を戦友たちの証言によって、また姉弟の個々の心情を交えて明らかにしつつ、太平洋戦争の実情も鋭く暴きながら、大どんでん返しでクライマックスを迎える終末へ疾走していくという流れです。読み進むほどに宮部久蔵という真の勇士が次第に浮かび上がってきます。

昨今、他人に多くの責任を押し付け、利己主義が堂々と罷り通る現代と比し、男らしさとは何なのかなど、太平洋戦争中に宮部久蔵がとった行動を通して様々な問いかけが聞こえてきます。

一般教育分野　准教授　野崎 亜紀子

オルダス・ハクスリー著（黒原敏行訳）『すばらしい新世界』 光文社古典新訳文庫 2013年

近未来、人は生まれながらにして一定の階級の下で生活をしています。それぞれに相応しい教育を受け、それぞれに相応しい職業に就き、苦しさやストレスを感じることなく、幸せな人生を送っています。相応しいパートナーを得て、相応しい子どもを産む。

相応しい子ども？

そうです。子どもは国営の〈孵化センター〉でその身に相応しい遺伝子を与えられ、作り出されるのです。子どもは各々の階級の下で相応しい人生を送ることが出来るように、その人生に疑問を抱くことのないように、〈条件づけセンター〉で教育を受け、大人になります。その社会に生きる誰もが、ストレスを感じず、苦しみを覚えず、疑問を持つことのない世界。

著者であるオルダス・ハクスリーは、著名な生物学者を世に送り出してきた英国ハクスリー家の一員です（祖父のトマス・ヘンリー・ハクスリーは、ダーウィン進化論を支持した生物学者、兄のジュリアン・ハクスリーもまた同様に進化生物学者でありイギリス優生学会の会長も務めました）。彼は1932年に、この世界を《すばらしい新世界》として描き出し、この《すばらしい新世界》に疑問を抱いてしまったある若者の、ある破滅的な物語を描きあげました。誰もが皆苦しみや疑問を感じることのない、否、感じることを知らず、感じるすべを持たないこの恐るべき世界を。彼は生物学の状況を理解し、自分の生きる世界の未来に、この恐るべき《すばらしい新世界》の到来を察知していたのでしょうか。何という慧眼。何という想像／創造力。

翻って、私たちの生きる現代の社会はどうでしょう？

望んでもなかなか子どもを得ることの出来ないカップルには、様々な医療技術が準備され、受精卵や胎児の状態は早い段階で明らかになる、そういう社会に私たちは生きています。しかし、この社会は《すばらしい新世界》とは違う、少なくとも本書の紹介者である私はそう考えます。様々な苦しみを抱える人たちに、何とか応えたい。未知の世界を何とか切り開いていきたい。そうした数々の困難や願いに向かって苦闘する中に、今の私たちの社会がある、と思われるのです。

しかし、それでもなお、今ある社会の状況は、この《すばらしい新世界》と何が違い、そして何が似ているのでしょうか？

私たちの今とこれからを想像し、創造する一冊になることでしょう。

一般教育分野　講師　坂本 尚志

永井均著 『マンガは哲学する』 岩波現代文庫 2009年

時として哲学者は、「火星人とのコミュニケーションはどのようなものか」や、「もし国家や法が存在しなければ人間はどうふるまうか」などといった極端な例を持ち出すことで、議論の本質を示そうとする。しかし、こうした仮定が複雑になっていくと、議論は錯綜し、わかりにくくなる。言語で表現されるという性質上、思考にはどうしても越えられない限界がある。たとえば蝶結びを文字で説明することの煩雑さ、むなしさを考えてみればよくわかるだろう。

永井均がこうした言語の限界にあらがうために本書で行ったのは、「マンガの哲学」を提示することである。マンガは、荒唐無稽な想定や言葉では説明しえない状況を、一枚の絵、一ページのコマの連続によって描き出す。マンガ以外のどのような手段によって、先祖の失敗を取り返すべく、子孫がネコ型ロボットを過去へと送り込むような状況を読者に納得させ、その行く末に興味を抱かせることができるだろうか。

本書の中心にあるのは、永井が一貫して考えてき

た「わたし」とは何かという問いである。この「わたし」は、さまざまなマンガの中に、過去の自分として、憎むべきあるいは愛すべき他者として現れる。「わたし」は、意味の過剰や欠如の中に放り込まれもする。哲学という視点から眺めると、マンガはまさに哲学的思考実験の場なのである。もちろんこのことは、すべてのマンガが哲学的であるということを意味しないし、マンガは哲学的に読むべしと決めつけるものでもない。むしろ、今や世界的な広がりを持つマンガというジャンルが持つ可能性を、哲学という媒介によって明らかにしたのが本書である。初版から20年が経ち、最近の作品はフォローされていないものの、読みの面白さは色あせていない。現在も哲学しつづけるマンガを読み解く手がかりとして、そして哲学的思考へのいざないとして、ぜひ読んでほしい一冊である。

図書館

森本武利編著（酒井謙一訳）『京都療病院 お雇い医師 ショイベ ～滞日書簡から～』 思文閣出版 2011年

本学創設の礎（いしずえ）となったドイツ人教師レーマン（Lehmann Rudolph, 1842－1914）とショイベとの交流を知ることができる本です。お雇い外国人レーマンや、日本におけるドイツ語教育の先駆者レーマンについて著された研究書などがありますが、京都で親しく交流したショイベが、そのときのレーマンを直に著しているという点において、研究書や業績を綴った本からは得られない、レーマンのふだんの姿が伝わってくるようです。

ショイベ（Dr. Bitho Scheube,1853 - 1923）は医学博士で、1877年（明治10年）に京都療病院に外国人医師として招聘され、京都府立医科大学創立の基礎づくりに貢献しました。当時の京都は、東京への遷都により、人口が激減し経済的にも減衰しつつあった時代で、同じドイツ人化学者ワグネル（Dr. Gottfried Wagner,1831－1892）、ドイツ語教師レーマンの仲良し3人組としてお互いに近くに住居を構え、頻繁に交流し、支え合いながら活躍しました。

この本はショイベが故郷の母に宛て、ドイツ出発（1877年）から帰国（1882年）までに近況報告として書いた111通もの書簡をまとめたものです。京都の生活習慣、四季折々の情景、気温や湿度などが詳細に記載され、さらに病院での診療や講義のこと、通訳や使用人のこと、自宅の様子、祇園祭や秋祭り、博覧会等のイベント、府知事や役人との折衝、セレモニーでのエピソード、ドイツ総領事や貿易商社との交流、ドイツ人仲間との会食や行楽、旅行中に見た日本各地の姿など多岐に渡り、当時の日本の姿をとても素直な視点で客観的に表現しています。

また、ショイベが京都で最初に落ち着いたのがレーマン宅であったこと、神戸への旅行や食事、散策など、当時の両人の交流を窺がえる記載も多く見受けられます。今年はレーマン没後100周年に当たります。是非一度読んでみては如何でしょうか。

この本は当大学図書館2階書架にあります。

コトバの「豆クイズ」～漢字編１～

（出題者　鈴木 栄樹）

今では、カタカナで書くことの多い国名や都市などの地名ですが、明治・大正時代には漢字で表記されることも普通でした。今年は本学創立130周年という記念すべき年で、これは1884(明治17)年に私立京都独逸学校が創設された年から起算しているわけですが、「独逸」をドイツと読むことはご存知ですね。和独辞典の「独」もこの表記からきています。ほかにも、アメリカ＝米、イギリス＝英、フランス＝仏、イタリア＝伊、スペイン＝西、ロシア＝露、インド＝印などの略字は普通に使われています。これらは、それぞれ米利堅（メリケン、亜米利加とも表記）、英吉利（エゲレス）、仏蘭西（フランス）、伊太利（イタリー）、西班牙（スペイン）、露西亜（ロシア）、印度（インド）の頭文字になります。

では、次の国名（①～⑧）・都市名（⑨～⑯）はどこでしょうか？（解答は22ページに掲載）

① 瑞典	② 白耳義	③ 葡萄牙	④ 土耳古
⑤ 埃及	⑥ 比律賓	⑦ 越南	⑧ 墨西哥
⑨ 紐育	⑩ 華盛頓	⑪ 倫敦	⑫ 牛津
⑬ 剣橋	⑭ 伯林	⑮ 桑港	⑯ 安特堤

マレーシア学会発表と短期語学研修

フォン・フー ワー教授および薬学英語分野学生一同

2013年3月、薬学英語分野所属の11名の学部生と共に、マレーシアへ行って参りました。クアラルンプールで開催されたGlobal Summit on Education (GSE) 2013にて当分野の研究について学会発表を行い、その後、英語教育の見学のためSunway Universityを訪問し、さらに、薬学部見学のためペナンにあるUniversiti Sains Malaysia (マレー語表記、略称はUSM)を訪問しました。また、2013年7～9月にかけて、6名の学生がSunway Universityに短期留学を行いました。今回は、GSE 2013とSunway Universityについてご報告いたします。

A)GSE 2013

当分野の研究成果（下記）を3月11～12日にクアラルンプールで開催されたGSE 2013にて発表いたしました。発表は当分野所属の5年次（当時は4年次）学生3名が行いました。学生にとっては初めての学会発表であり、またコミュニケーションは全て英語で行われることから、少々心配もありましたが、多数の参加者から好評を得られたことは、学生たちにとっても大きな励みとなったことと思われます。

1.樋口裕城・平井絢菜,・藤田あゆみ・藤原直子・岡森静良・FW FOONG (2013). English for sciences in a Japanese university: expressing chemical elements, compounds and mathematical equations. GSE Journal of Education 2013. 200-206

2.藤原直子・藤田あゆみ・岡崎祐花・井上瑤子・樋口裕城・FW FOONG (2013). Needs of learning tools for acquiring scienctific English in a Japanese university: a controversial issue. GSE Journal of Education 2013. 207-212

3.岡森静良・井上瑤子・樋口裕城・平井絢菜・岡崎祐花・FW FOONG. Acquiring listening ability in scientific English in a Japanese university: effective teaching of basics with education. Global Summit on Education 2013. March 11-12, 2013. Kuala Lumpur, Malaysia.

（1, 2はGSE Journal of Education 2013に投稿・査読・受理・掲載済み）

B)Sunway University

マレーシアにおける英語教育の視察のため、Kuala Lumpur近郊のSelangor州Petaling JayaにあるSunway Universityを3月13日に訪問しました。Sunway UniversityではIntensive English Programme (IEP)という課程により、学生が英語で行われる学位課程の講義等に対応できる英語力を身につけられるように教育が行われています。Sunway Universityでは、マレーシア出身者はもちろんのこと、90以上の国々からの留学生が学んでおり、非常に国際色豊かです。IEPでは、Written・Oralの2本立てでクラスが編成されており、試験によって学生をWritten 1～4、Oral 1～4のクラスに配置し、各学生のレベルにあった教育が行われています。英語を母国語としない学生に対し、高等教育に耐え得るレベルの英語力を身につけさせるためのノウハウが蓄積されており、我が国の大学も参考にすべきであると思われることが非常に多いと実感いたしました。年4セメスターの学期設定で講義が行われていますが、海外の大学・専門学校に在学中の学生の短期受け入れも行われており、Vacation English School (VES)と称し、韓国の大学から毎年短期の留学生を受け入れているそうです。

At the entrance
leading to the Administration Office

Students listening to a lecture

The university campus is located within the Sunway Lagoon and Shopping Mall: the whole set-up is like a community, where you always can study and have fun together.

C)Sunway University短期語学研修

1）樋口裕城（2013年度：5年次生）

感想

Sunway University IEP（Intensive English Programme)のクラスは少人数（10名前後）であり、先生方は非常に丁寧に一人ひとりをサポートして下さいました。Sunwayの中には大学のキャンパスだけではなく、ショッピングモール、ホテル、テーマパーク、病院などもあり、何不自由なく過ごせました。

難しかったこと

最初の1週間程度は電話で英語を話すことに慣れていなかったため、電話が鳴るとおびえていました。（1週間もすると友人もでき、電話にも慣れ、毎日のように電話で友人を誘って観光・食事・買い物などをし、楽しく過ごしておりましたが）

良かったこと

英語で日常生活・大学生活を送ることに対し、自信がつきました。もし今、海外の大学に留学することになっても、言語面での不安はあまり感じないと思います。また、マレーシア滞在中は様々な文化に触れることができました。今年7月9日～8月7日はマレーシアではRamadan（断食）の時期であり、イスラム文化の一端を感じることもできました。そのほかにも、様々なバックグラウンドを持つ友人たちから、それぞれの文化を学ぶことができました。

その他

マレーシアのみならず、ロシア、タイ、ベトナム、中国、韓国、インドネシア、サウジアラビアなど数えきれないほど多くの国から来た友人たちに出会うことができ、良い思い出ができました。近い将来、再び会えることを楽しみにしています。

2）安田圭央理（2013年度：3年次生）

感想

今回のマレーシアでの語学研修を通して本当に多くのことを学ぶことができました。自分よりも年下の子達が親元を離れ自立した毎日をたのしんでいる姿を見て、積極的に色々なことにチャレンジする素晴らしさを感じました。とにかくコミュニケーションをとる時に努力が必要でした。

難しかったこと

書かれてある英語を理解することはできても、みんなでお喋りを楽しんでいる時の内容を理解して会話に入っていくのは気を抜けないし、大変でした。それでも、私にも理解ができるように色々な言い回しで伝えてきてくれる友人たちのおかげで楽しく会話ができました。

良かったこと

マレーシアで友人になった方々がみんなとても親切な人達で本当によかったです。困っていたら助けてくれたり日本の事について興味をもって話しかけてくれたりと、とてもあたたかい人々でした。マレーシアの人々はもちろん、その他色々な国からきた人達と接することができました。その人たちの文化を教えてもらうことで自分の世界が広がったように思います。本当に貴重な体験ができました。

3）卜部彰子（2013年度：3年次生）

感想

最初は慣れない環境に戸惑いましたが、行って良かったと思います。授業や日常会話もすべて英語なので、すごく勉強になると思います。1ヶ月はすごくあっという間でした。

難しかったこと

予想以上に英語の聞き取りが難しかったです。早く喋られると全くわからないこともよくありました。あと、食事や水回りに最初苦労しました。

良かったこと

様々な国の人達と友達になれたことです。同じプログラム、大学に各国から生徒が集まっているので国のバリエーションが凄いです。友達と一緒に過ごすのはとても刺激を受けます。

4）田中なお（2013年度：3年次生）

感想

今回1ヶ月だけ参加したコースは、大学で英語を使って勉強するために英語を習得することを目的としたコースで、マレーシア近隣の様々な国から英語を第一言語としない生徒が集まっていました。毎日英語で英語の授業を受け、日本語ででも書いたことがないような長さのエッセイを書き、英語で議論をし、すべてがとてもよい刺激になりました。また友人との会話がそのまま勉強になるので、とにかくみんなよくしゃべります。文法的には正確でない英語でも自信満々で話し、勢いとボディーランゲージで通じさせてしまいます。これは完璧主義者かつシャイといわれる日本人にはなかなか難しい力業だと感じましたが、この力業によって彼らは実際に使える

英語をどんどん習得していくのだろうと思いました。 正直なところ、この１ヶ月で私の英語の力が大きく伸びたとは言いがたいのですが、英語を使うということへの意識は確実に変化しました。英語は日本語に比べて単純で、間違えることに対しても寛容です。自国にいてもそれに気づける人は気づけるだろうけれど、私はこの体験がなければ英語を使うことを難しく感じ、ずっと恐れ続けていたと思います。 マレーシアでの1ヶ月はとても短く感じました。独特の香辛料を使った料理や、衛生面での日本との落差など、順応するまでに苦労したこともありましたが、建築や歴史や文化など英語以外の点で学ぶことも多く、本当にいい経験になりました。この経験は私の今後の学びにとって、とても重要で役に立つものになると思います。

5）小山友紀恵（2013年度：3年次生）

感想

初めての留学で最初は緊張したし、色んな人種がいたので考え方もみんな違って困ることもありました。でもだんだん話せるようになってきて仲良くなるとすごく楽しかったです。

難しかったこと

自分の言いたいことはある程度は伝えられるのですが、相手が何を言っているのか聞きとるのが最後までなかなかできませんでした。気を遣ってゆっくり話してもらわないと全然理解できませんでした。

良かったこと

自分がとても狭い世界にいたと痛感しました。日本では高校生くらいの年の子が親元を離れて海外で勉強していたり、当然のように海外で働くのを目標にしている子がいっぱいいたりして、すごく刺激的でした。日本にいたらきっと知ることができない事だったので、とてもいい経験になりました。

6）坂野晴朗（2013年度：4年次生）

感想

今回サンウェイ大学で受講したVESプログラムはとても有意義なものでした。筆記・リスニング・英作文・面接の試験結果に基づいて中程度のレベルに所属しましたが、最初は大変でした。渡された講義プリント自体は易しめの内容だったものの、講師の説明や課題指示が速くて聞きとれずに苦労しました。また、少人数なので授業中頻繁に当てられるので、うまく自分の伝えたいことが伝わらず、辞書を常に持ち歩いていました。ただ、様々な国から生徒が集まるので講師の説明は非常に丁寧であり、どのように表現すれば理解してもらえるだろうかという思いがひしひしと伝わってきました。他にも、宿題が毎日出されるだけでなく、英作文は全員が添削後の指導を受けるので、受けっぱなしにならずに3週間だけでもしっかり学習できました。講義が終わった後は同じ学生寮の留学生と夕飯を食べながらお互いの国について色々話したり、深夜に一緒に映画を見に行ったり、忙しいながらもとても充実していたように思います。休日には観光プログラムも用意されており、語学力に不安があっても十分楽しめるようよく工夫されていました。反省点としては、日常会話の聞き取りが難しく、平易な表現でゆっくり話してもらわないと理解できなかったり、知っている単語でも耳からだと気付かなかったことも多かったので、もっとたくさんの人たちと話せなかったことが残念です。マレーシアは治安が良く、学生・一般の方々も親切なので海外自体が初めての自分としては今回のプログラムに参加できたことは非常に幸運だったと思います。

Sunway University の Intensive English Programme の Headであり、Centre for English Language Studies の Deputy HeadであるJeanette Lim先生からIEPに参加した学生に対して、以下のようなコメントを頂きました。

Dear Prof Foong: I am pleased to report the positive comments from my colleagues regarding your students. Yuki Higuchi stood out so prominently that we have decided to devote an entire paragraph to describe his progress.

(A) Yuki Higuchi: We have many positive comments to make about Yuki who set high standards and pursued them diligently. A mature, disciplined and self-directed learner, his work was consistently thorough and detailed. Feedback from the lecturer on his speech presentations was always well-received and noted in subsequent performances. His positive and friendly disposition had won him rapport and good will from the international student community. He also won the Best Student Award for the Written Level 4 class in which he was placed.

(B) General comments about AKIKO URABE, KAORI YASUDA, NAO TANAKA, SEIRO BANNO, YUKIE KOYAMA: It was a pleasure having them in our classes. They participated in class activities and worked well with their classmates. All were hardworking, polite and eager to learn. In particular, Nao and Yukie showed much improvement in the delivery of their oral presentation.

追記：Sunway Universityへの短期語学研修にご興味をお持ちの方はフォン教授までご連絡ください。

異文化体験

ドイツ・フライブルク大学主催の
「日本人学生のためのドイツ語サマープログラム」に参加して

ドイツ南西部にあるフライブルク大学で「日本人のためのドイツ語サマープログラム」が開催され本学からも2年次生を中心に14名が参加した。今回から国際局と語学教育センターの共催になり、申し込み方法や現地でのサポート体制などにいくつかの変更点が加わった。しかし授業や催しには何ら変更はなく大変充実したドイツ滞在の機会が提供された。ドイツ語が選択となり最初の2年次生が参加したが、参加者が従来よりも10名近く減少したことは残念であった。それでも本学からの参加者のために、フライブルク大学は医学部付属病院にある院内薬局の見学を開催していただくなど、便宜を図っていただいた。これも長年わたる多数の参加者を送り出している本学への敬意の表れである。「異文化体験」というタイトルで今回のサマープログラム参加者の代表にドイツでの体験や思い出を投稿してもらった。1ヶ月という大変短いドイツ滞在であったが、参加者にとってとても充実した意義深いプログラムであったことがうかがえる体験記である。この文章を読んで関心を持ったら是非とも次回、人生観が変わるような異文化体験をしてほしい。2014年もさらに充実したサマープログラムが予定されている。これだけの期間外国で自由に過ごせるのは、そう今でしょう。　　桑形広司（ドイツ語担当准教授、日本フライブルク会会員）

（注）ドイツでは18歳以上の飲酒は合法です

サマープログラムに参加して

2年次生　福田 大祐

この夏の8月、短期語学留学という形でドイツのフライブルクで過ごしました。将来、大学を卒業して社会人になってからでは海外留学という経験はなかなか出来ないものですし、このプログラムの存在を知って行こうと決めました。

初めての海外での生活に、最初はいろいろ戸惑うこともありましたが、すぐに慣れて毎日が楽しい日々でした。学生寮ではいろいろな国から来たルームメイトがいました。少しクールな感じのドイツ人や、日本好きなトルコ人などいろんな人がいて、寮で会うといつも明るく話しかけてきてくれました。ドイツ語での会話は難しいので、たどたどしい英語で会話していましたが、一生懸命耳を傾けて話を聞いてくれる優しい人ばかりでした。

フライブルク大学では、平日の午前中に2コマのドイツ語の授業がありました。各々のレベルによりクラス分けがされ、ほとんどドイツ語と英語のみで授業が行われるクラスから、日本語が喋れる先生がほとんど日本語で授業をしてくれるクラスもあります。授業では、基本的なドイツ語の文法から、ドイツでの生活で使える便利な日常会話も教えてもらいました。フライブルクで生活を始めた当初は、やっぱりドイツ語より英語を使ってしまいがちでしたが、授業で習ったドイツ語を使ってみて実際に通じた時は嬉しかったです。

ドイツでの生活で一番楽しかった思い出は、友達といろんな所へいって過ごした時間でした。フライブルクは、地理的にもスイスやフランスにも近く、スイスのバーゼルや、フランスのアルザス地方のコルマール、フランスのパリへも行きました。ヨーロッパパークという、1日では遊びつくすことが出来ないほどの、ものすごく大きい遊園地へも行きました。このサマープログラムには1泊2日のツアー企画もあり、バイエルン州にあるノイシュバンシュタイン城へも行きました。城内は見学もでき、近くの橋から眺める城の外観は素晴らしく感動しました。サマープログラム参加生向けに、様々なレクリエーション企画もされていてビアガーデンに行きましたが、そこでは他の日本の大学から来た人とも交流して友達も出来ましたし、ソーセージを食べてビールを飲んで、賑やかにお喋りしてとても楽しかったです。

このサマープログラムでの経験は、自分にとって勉強になることばかりでした。日本とは異なる異文化の地で生活して、刺激的で楽しい日々を送ることができ、自分の視野も広がったように思います。この夏、とても素晴らしい経験ができたことを感謝し、これからの人生に生かせればいいなと思います。Danke schön！

お別れパーティでのクラス写真

フライブルクの展望台からの街並み

Prost!

2年次生　花井 拓斗

ドイツから帰国してから知ったこと。ビールでの乾杯はドイツ語でProst、でもワインでの乾杯はZum Wohlといって少し上品な感じになるとか。機会があれば今度使ってみようと思う。

この夏、ドイツに1ヶ月間滞在して、フライブルクのみならず遠くの街や他の国に行ったことで、建物や自然を見物し、食や言語などその土地ならではの文化を体感することができました。有名な観光地も周遊し、たくさんの思い出作りができたように思います。しかしながら、こうして文章を書くにあたってドイツでの生活を振り返ると、そういった思い出よりもむしろ、ドイツで1ヶ月間暮らした、その日常生活での思い出が一番に頭に浮かびます。

授業開始当初、全く授業についていくことができず大苦戦でした。1年間大学でドイツ語を勉強していたのにも関わらず、単語力が決定的に欠けていたため、当然のようにドイツ語しか話さない先生の説明が、何一つ理解できませんでした。また、そんな授業にも平然と対応する他の学生を見て、ただ焦るばかりでした。そんな状況でも挫けることなく1ヶ月を乗り切ることができたのは一緒にいた仲間たちのおかげだと思います。というのも同じクラスの京薬メンバーも皆自分と同様かそれ以上に授業についていけないことに不安を覚えていることが分かり、だからこそ自分はしっかりしなければと思うようになれたからです。出された宿題を一緒にこなし、授業中も助け合うことでお互いに高めあうことができたのではないかと思います。授業が終わりに近づくにつれ、先生の説明が聞き取れるようになり、街を歩いても標識が読めるようになっていたり、店での値段が聞き取れるようになったりして、成長を実感するようになりました。

そんな本学のメンバーたちとは授業だけではなく日常生活でも共に行動することが多かったです。授業が終わっては、街に繰り出し昼食を食べ、ときにはレクレーションに参加し、時には寮の部屋に集まって皆で翌日の予定を話し合ったり、ビールやワインで乾杯したり。遠出する時もたいていは一緒でした。ヨーロッパパークに始まり、スイス「バーゼル」やフランス「コルマー」、フュッセンやフェルドベルクなど、思い出を振り返ればキリがありません。本当に充実の1ヶ月でした。

さて、ドイツから帰って数カ月たちますが、今でも時々ドイツ語が口をついて出てくることがあります。また、ドイツ語は自然と耳に留まります。帰国した当時は日本のお金と値段の表示を見て、一瞬どう払っていいのか分からなくなったこともありました。辺りを見回してもドイツ語の表記が全くないことにも違和感を覚えたほどで、たった1ヶ月なのに随分とドイツに染まってきたな、と自分でも少し感心するほどでした。また、ドイツ語に限らず、数々の失敗や様々な場面での拙い英語での会話などドイツでの経験全てが自分の成長につながっているのだと思います。そしてそんな成長も仲間たちがいたからこそだと思います。だから、そんな成長の機会を与えてくれた仲間たちとともに。Prost!

フライブルク市街地で

担任のフィル先生と

世界ふれあい街歩きにあこがれて

3年次生　籾山（もみやま） 京子

私のドイツでの生活は人情に支えられた1ヶ月でした。寮が満室になり留学を諦めかけていた時、桑形先生の仲介でドイツのご友人の、そのまた友人に部屋を貸して貰える事になり、滑り込みで決まったドイツ行き。「フランクフルトからICE（高速列車）でフライブルクへ行き、ブライザハ行きの電車に乗り換える」だけを頼りに飛行機に乗りこみました。しかし隣の酔ってご機嫌さんの男性が気にかけてくれ、現地に着いてから息子さんにICEまで送って頂き、券売機操作やホームの番号まで教えて頂きました。フライブルクでブライザハ行きの電車を探した

時も、時刻表が1時間ごとにすべての路線を一括表記するスタイルでさっぱり読めず、歩いてきたお姉さんに探してもらいました。全てが終わり就寝は22時でしたが、ようやく日が落ちた頃でした。大家さんのおばあさんはまさかドイツ語の話せない店子が来るとは思わなかったようですが、電子辞書を翻訳機代わりにドイツの生活やフライブルクとブライザハの歴史について教えてくれました。

ブライザハはライン川の畔にあるワインの産地で、対岸にフランスを臨む小さな町です。フライブルクまで都市近郊電車で30分とそれほど遠くありませんが、運行本数が少ないので初めは大変でした。滞在中にレール交換のための運休に当たってしまい、帰りの電車が来ずに呆然としていたところ、仕事帰りの男性が臨時バスの停留所まで引っ張って行ってくれました。ドイツに移民した方で、「語学は話さないと上手くならないから」といって、イリンゲンで降りるまでの間ずっと英語のブラッシュアップに付き合ってくれました。

この滞在で感じたのは、はっきり表現することの大切さです。笑顔で挨拶をすると強面のおじさんでもニッと笑顔で返してくれるし、そこから会話が弾んで町を案内してくれる人もいました。どの人も「教えて」や「困った」を伝えると、私の拙い英語に大きく！ため息をつきながらでも最後まで助けてくれました。「君がしたいならそうしてあげるよ？」と言ってくれる事も多くて、とても印象的でした。しかし道を聞いたおばさんに「車で送っていこうか？」と言われたのは、きっととんでもなく厄介な子だったから！

授業中にパメラ先生が「私たちにとって相手が何を考えているか分からないことは大変ストレスで、ディスカッションはむしろ全く問題ない」と毎回のように言っていましたが、本当にそうだと思いました。日本でも実践したいです。寛容で生真面目で優しい人がいるドイツ。またぶらっと行きたいと思います。

ブライザハの高台より
川の向こうはフランスのアルザス地方

町の象徴である聖シュテファン大聖堂

ブライザハの街並み

Library News

図 書 館

開 館 日 程

2014年 1月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2014年 2月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

2014年 3月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

休館　9：00-20：00　9：00-17：00　10：00-17：00　休館=館内整備

2013年11月のオープンキャンパス開催

入試課

2013年11月3日（日）に秋のオープンキャンパスを開催しました。曇り空から雨模様となる天候でしたが、同日は京薬祭の模擬店出店等もあり、380名（前年比89.2% 内訳は、高校1年生：41名、高校2年生：68名、高校3年生：79名、既卒生：10名、付添者：182名）の参加者がありました。今回は開始時刻を10：00から躬行館T31講義室、10：30から躬行館Q31講義室の2会場で実施しました。

「学長挨拶」、「大学紹介（入試広報委員長）」、「在学生の話」、「卒業生の話」、「見学施設の概要説明」を2会場で実施後、「施設見学」、「相談会」を行いました。

「在学生の話」では、6年次生の本岡ゆり子さんに本学を志望した理由、分野での研究やクラブ活動、病院・薬局実習や語学留学などご自身の体験をお話していただきました。

「卒業生の話」では、パレクセル・インターナショナル株式会社に勤務されている数馬裕子様をお招きして、本学の魅力や本学を選んだ理由、本学に在籍し経験したことのメリット、企業での仕事などをわかりやすくお話いただきました。「在学生の話」、「卒業生の話」ともに参加者にはたいへん好評でした。

「施設見学」では、臨床薬学教育研究センター、躬行館にある6分野および図書館の協力を得て見学を行い、好評を得ていました。

「相談会」は、本学の職員と在学生が相談員となり、113名（前年比85.0%）の相談者がありました。相談内容は、入学試験や進路、奨学金、学生生活などで、相談会参加者のとても熱心に質問、相談される姿が印象的でした。

今後とも、参加者の方に本学の教育・研究環境を知って戴くためにオープンキャンパスをより一層充実したものにしていきます。

学長挨拶

施設見学

相談会

京薬祭の様子

2014年度推薦入学試験結果

2014年度推薦入学試験の内、指定校制推薦入学試験が2013年11月11日（月）に、一般公募制推薦入学試験は11月16日（土）に実施され、11月26日（火）に合格発表が行なわれました。

その結果は次のとおりです。

	募集人員	志願者数	合格者数
指定校制推薦	50名	52名	52名
一般公募制推薦	80名	359名	81名

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「生体内の微小環境情報に基づいた物性制御による環境応答型インテリジェントナノDDSの創成」キックオフシンポジウム実施報告

研究代表者　小暮 健太朗

日時：平成25年10月24日（木）13:30～17:30
場所：京都薬科大学　愛学ホール
参加者数：165名（職員：42名、学生・大学院生123名）

特別講演（1）の様子

プログラム
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＜開会の挨拶＞
乾 賢一（京都薬科大学長）
＜プロジェクトの概要について＞
　小暮健太朗（薬品物理化学分野・教授）

＜特別講演（１）＞
「機能性ナノ粒子の製剤設計　Functional Engineered Nano-sized Particles」
　尾関 哲也 教授（名古屋市立大学大学院薬学研究科　薬物送達学分野・教授）

＜一般講演（１）「疾患微小環境の特異的特性の探索」＞
「環境応答性インテリジェントナノDDSを応用した消化管傷害の少ない抗炎症薬の開発」
　加藤 伸一（薬物治療学分野・教授）
「神経変性疾患脳における微小環境変化の解析」
　北村 佳久（病態生理学分野・准教授）
「緑膿菌トランスロケーション機構の解明から標的指向性DDSへ」
　後藤 直正（微生物・感染制御学分野・教授）
「難治性気管支喘息の肺における微小環境変化とこれを制御する治療方法の開発」
　奈邉 健（薬理学分野・准教授）
「インテリジェントナノDDS構築のための腫瘍微小環境の解析」
　濵 進（薬品物理学分野・講師）

特別講演（2）の様子

＜特別講演（２）＞
「腫瘍内微小環境の能動的制御に基づくDDSの開発」
　石田 竜弘（徳島大学大学院HBS研究部薬物動態制御学分野・准教授）

＜一般演題（２）「微小環境応答性インテリジェントナノDDSの開発」＞
「薬物送達を目的とした脂質ナノエマルションの開発とその体内動態研究における19F-NMRの応用」
　武上 茂彦（薬品分析学分野・准教授）
「白金ナノ粒子をベースとした疾患環境応答型ナノDDSの開発」
　草森 浩輔（薬剤学分野・助教）

＜一般演題（３）「疾患微小環境におけるナノDDSの機能性評価」＞
「B細胞性リンパ腫を標的とした抗腫瘍薬開発：インテリジェントナノDDSの活用」
　藤室 雅弘（細胞生物学分野・教授）
「癌化学療法における抗癌剤の適正使用を目指して」
　西口 工司（臨床薬学分野・教授）

「熱ショックタンパク質のがんへの関与と薬物送達戦略における利用」
齊藤 洋平（生化学分野・助教）
「有害事象を回避するためのDDS」
西田 健太朗（衛生化学分野・助教）

本キックオフシンポジウムは、本年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された「生体内の微小環境情報に基づいた物性制御による環境応答型インテリジェントナノDDSの創成」（以下「インテリジェントナノDDS」）に参画する全ての研究者が会して、プロジェクトの全体像の把握を目的とし、さらにプロジェクト内共同研究の契機となることを期待して企画されたものである。また、本プロジェクトに学外研究者としてご参画頂いている名古屋市立大学の尾関哲也教授と徳島大学の石田竜弘准教授をお招きし、特別講演を行っていただいた。両先生はいずれも薬剤学・DDSが専門であるため、学内研究者にとってはあまり馴染の無い内容であったにもかかわらず、参加者は興味深く聴講していた。また、若手研究者を含む学内11分野の教員にも、各々の研究とプロジェクトにおける役割および貢献できることを発表していただいた。日頃、研究領域の異なる学内教員の研究発表を聞く機会がなかったため、とても新鮮であり、興味深いものであった。本プロジェクトは、「病態の微小環境」をキーワードに、異なる専門領域の研究者が集まって構成されているものである。そのため、当初は他領域の発表に対して、興味を抱きにくいのではないかと危惧したが、微小環境というキーワードを基点としたことで、多くのプロジェクトメンバーが発表内容に興味を持つことができた。実際、活発な質疑応答が行われたため、予定時間をオーバーしてしまうほどであった。また、大勢の学生・大学院生にも参加していただけたことから、本学の研究面におけるアクティビティーの高さを感じてもらえたのではないかと思っている。本プロジェクトを契機として、学内・学外共同研究が活性化されるとともに、次代を担う若手研究者の育成に繋がることを期待している。今後、定期的にプロジェクト内での発表会を行うことで、今回のキックオフシンポジウムで示したアクティビティーを維持できるよう尽力していきたい。

シンポジウムの様子

第99回薬剤師国家試験

学生課

第99回薬剤師国家試験は、次のとおり実施されます。

試験期日　2014（平成26）年3月1日（土）・　3月2日（日）
試験地　　北海道　宮城県　東京都　石川県　愛知県　大阪府　広島県　徳島県　福岡県
試験科目　［必須問題試験］
物理・化学・生物、衛生、薬理、薬剤、病態・薬物治療、法規・制度・倫理、実務
［一般問題試験］
・薬学理論問題試験
物理・化学・生物、衛生、薬理、薬剤、病態・薬物治療、法規・制度・倫理
・薬学実践問題試験
物理・化学・生物、衛生、薬理、薬剤、病態・薬物治療、法規・制度・倫理、実務
合格発表　2014（平成26）年3月31日（月）午後2時

教育後援会からのお知らせ

学生課

2013年度の教育後援会総会が、11月1日（金）13時30分からA31講義室に於いて開催され、59名のご父母にご参加いただきました。

はじめに、福田会長、武田理事長の挨拶があり、続いて乾学長から大学の近況等について説明が行われ、その後議事に移りました。

まず2012年度の決算報告が行われ、次に2013年度事業計画ならびに予算（一般会計）が下記のとおり承認されました。また、2014年4月に迎える京都薬科大学創立130周年記念事業として、1,000万円を大学に寄付すること（特別会計）も併せて承認されました。最後に、奥村副会長の退任および中山会計監査の副会長就任、2年次生父母幹事小林様の会計監査就任など役員の紹介があり、議了しました。

その後、進路支援部長の西口教授から「学生への進路支援」について説明が行われ、最後に福田会長より閉会の挨拶があり、総会を終了しました。

●2013年度教育後援会予算（一般会計）

項　目		予 算 額	使　途
学生生活支援事業		1,440,000	学生教育研究災害傷害保険料補助（6年間分）
		200,000	保険適用外初診料補助（上記保険適用外の初回治療費を補助）
		1,000,000	学生補助金
		150,000	弔慰金
		1,500,000	課外講座受講料補助（学内で開講する課外講座の受講料の一部を補助）
		200,000	一般図書の寄贈
		500,000	卒業祝賀会への協賛
		963,200	卒業記念品の贈呈
	小　計	5,953,200	
父母対象事業		300,000	会合費・事務費・郵送料
		1,500,000	ＫＰＵニュース郵送料
	小　計	1,800,000	
教育研究支援事業		558,600	分子模型の贈呈（2014年度新入生対象）
		1,852,500	参考書「治療薬マニュアル」の贈呈（2014年度4年次生対象）
		258,560	国家試験対策模擬試験 解説講義料
		1,264,200	インターネットを利用した自己学習支援システム
	小計	3,933,860	
予備費		350,000	
支出合計		12,037,060	

学生相談室だより

学生課

学生相談室は、学生さんが、学業のこと、友だちのこと、家族のこと、自分のことなど、充実した学生生活を過ごせるようサポートするために、学内に設けられている相談室です。相談員は、「臨床心理士」という心の専門家の資格をもったカウンセラーが担当しています。

学生相談室では、毎回学生さんのお役に立ちそうな情報を、「学生相談室だより」でお伝えしています。今回は、「アサーション」について取り上げます。

アサーションとは

アサーションとは、自分の考えや気持ちを、相手の考えや気持ちも大切にしながら、その場の状況にあった適切な方法で伝える、「自分と相手をともに大切にした自己表現」のことをいいます。

自己表現のタイプ

自己表現には大きく分けて、主張的な自己表現（自分の考えや気持ちははっきり言うが、自分勝手で押しつけがちになる）、非主張的な自己表現（自分の考えや気持ちを言うことが苦手で、相手の様子をうかがってしまう）、アサーティブな自己表現（アサーションを取り入れた自己表現）があるといわれています。

アサーションを活かす

人と人とのコミュニケーションでは、自分の思い通りにならず相手と衝突をしたり、自分の意見が言えず自分の中で抱えてしまうことも起こります。アサーションは、悩んだり考えたりしながら、お互いの思いや考えを率直に話し合い、お互いを大切にして、理解し合うことで、関係を深めていくための自己表現です。アサーションに興味や関心のある方は、学生相談室までお気軽にご相談ください。

参考『カウンセラーのためのアサーション』
（平木典子他編著・金子書房）

学生相談室からのお知らせ

□相談場所　育心館４階（医務室から移転しました）

2013年10月15日より、学生相談室が、育心館４階に移転しました。カウンセリングに加えて、サロンも開設しました。サロンでは、静かにひと休みする場所として、利用していただければと思います。

□相談時間・相談員

学生相談室の相談（カウンセリング）は、臨床心理士が担当しています。

相談時間は以下のとおりです。

●月・火・木曜日　10:00～17:00
●水曜日　9:30～13:30
●金曜日　9:30～16:30

2014年4月から、1名の臨床心理士が常勤となります。（相談時間　9:00～17:00）

□予約方法・問い合わせ先

予約制ですので、相談をご希望される場合は、学生相談室（育心館4階）へ直接申し込むか、電話かメールでご連絡ください。相談は無料です。

・電話（学生相談室）：075-595-4672
・メール：gakusou@mb.kyoto-phu.ac.jp

2013年度京薬祭を終えて

2013年度京薬祭実行委員長 柴 俊輔

京薬祭が終わり大きく落ち着いている中、少し物足りなさを感じながらこの原稿を書いています。

後期から京薬祭の当日まで約2ヶ月間、毎日夜8時に集まり、今年は実行委員60人と過ごしていたことを考えると、終わってからの夜が本当に静かで寂しさが感じられます。

まずは、昨年の京薬祭終了後から、1年間共に今年の京薬祭をより良いものにするために実行委員を支えてきた幹部を紹介します。

実行委員長	柴　俊輔(3年次生)
副実行委員長	宇野　智也(3年次生)
文化部長	高山　幸也(3年次生)
書記長	織田　千尋(3年次生)
会計部長	木村　朱李(3年次生)
庶務部長	矢崎由希子(2年次生)

実行委員会の幹部メンバー

以上6名で今年の実行委員を引っ張って、活動を行ってきました。また今年はOBさん・OGさんにも去年と同じ位お手伝いしていただいたことに感謝します。

振り返ると私が実行委員会に入ろうと思ったきっかけは、「人とのつながりを増やしたい」と思ったからです。また中・高校と実行委員のようなものには参加せずに文化祭を手伝っており、自分の中でやりたいことができないもどかしさがあったからです。そこで私は大学では自分の時間が出来て、自分のやりたいことができ、大学でこそ自分が今まであったもどかしさを払拭できると考えて入学前から実行委員に入ろうと考えていました。

1年次生の時から今年の京薬祭が終わるまでの約2年半、実行委員として活動してきましたが、自分の高校時と比べるまでもなく頑張れたことで最後の学園祭を終えたときに心からうれしいと思えた自分が誇らしく思います。また多くの仲間も涙を流して、最後までやれたことをうれしく思った人は多かったです。その姿を見るたびに、私たちは仲間で協力し合いながらできたと感じ「実行」に所属していてよかったと心から思うことができます。

そして、京薬祭を終えてから「お前が実行委員長でよかった」「先輩が実行委員長でよかったです」と同級生だけでなく後輩にも言ってもらえましたが、ほかにもこのように思ってもらえる人がいれば幸いです。私はこの実行委員会は、自ら考えることをし、様々な人と関わり、仲間と協力し、高め合い、京薬生として、一人の人間として知らないことを楽しく学べる場であると考えます。

今年度のテーマ

私自身、大学に入学してから3度目の京薬祭を迎えるまでに友人から「顔広いな」と言われるくらい多くの人と出会い、関わり、その度に色々なことを学んでいると感じていました。

来年の京薬祭のため既に活動している実行委員の後輩達も、京薬祭を終えたとき心から何かを思えるように出来るように、1年間頑張って活動に励んでもらいたいと心から願っています。

模擬店の様子

最後になりましたが、2013年度京薬祭の開催にあたり、ご理解、ご協力を頂きましたすべての関係者、近隣住民の皆様に深く感謝すると共に厚く御礼申し上げます。

クラブだより

バドミントン部

活動実績

関西薬学生バドミントン大会
　シングル3位、ダブル3位
京都学生バドミントンクラス別大会
　シングル2位、ダブルス2位、新人戦3位

今後の予定

4月 京都学生バドミントンリーグ戦大会（団体）
5月 四薬戦
8月 関西薬学生バドミントン大会
10月 医歯薬戦
11月 京都学生バドミントンクラス別大会（個人）

柔道部

～試合成績～

〈第67回関西薬学生連盟柔道大会〉
団体戦　準優勝
個人戦　1位　小西　一誠　（5年次生）

〈第51回京都十二大学親善柔道大会〉
団体三人戦　ベスト4

当部は、平成14年に最後の部員が卒業して以降、10年近く休部状態にありましたが、我々現役部員が平成23年に活動を再開しました。

以来3年目となりますが、選手、マネージャー含め、部員も少しずつ増え、再開後2度目の出場となる薬連大会に続き、通称十二大学の大会でも上記のような成績を修め、練習にも活気が出てきたように思われます。

これも一重に師範のご指導やOB諸氏のご支援の賜でございます。

柔道による事故のニュースは絶えませんが、だからこそ大きな怪我のないように配慮しながら、柔道を楽しむことを目的として日々汗を流しています。

少しでも興味のある方は、練習を見に来ていただけると幸いです。詳しくはHPをご覧ください。

http://judokpu.wordpress.com/

マンドリン部

去る10月14日(月)、京都府立文化芸術会館に於いて開催されました第85回定期演奏会は、大盛況の内に終了致しました。

御来場頂いた多くの方々を始め、惜しみない御支援、御協力を賜りました全ての方々に、心より御礼申し上げます。

美術部

こんにちは、美術部です。

美術部では、のんびりと自分の作品を作っております。

絵画だけでなく、彫刻、版画、書道等、自分の好きな部門を個人個人でやっております。

活動報告

去年では、京都九大学合同展や、京都市の50年後、100年後の京都を描く企画にも参加しました。

また、美術部の個人展を京薬祭等でやっております。

管弦楽部

こんにちは！京都薬科大学管弦楽団です！この楽団には、楽器の演奏経験がある人から全くの初心者までいろいろな人が入団し、みんなで一緒に、年に一度行われる定期演奏会に向けて日々練習しています。2014年は、11月29日(土)に開催させていただきます。みなさんぜひお越しください！

剣道部

今年度活動実績：春季医歯薬学生剣道大会
　女子団体　3位
全国薬学生剣道大会
　女子団体　優勝
　男子個人　3位
　女子個人　3位

来年度試合予定：4月 関西学生剣道大会
6月 京滋学生剣道大会
　春季関西医歯薬学生剣道大会
8月 関西薬学生剣道大会
　全国薬学生剣道大会
9月 関西学生剣道優勝大会
10月 京滋学生剣道新人大会
　秋季関西医歯薬学生剣道大会
11月 関西学生剣道新人大会

私たち剣道部は現在、1・2年次生16人の部員で活動しています。

今年度は試合での大きな結果を数多く残すことはできませんでしたが、部として目標としていた関西学生剣道優勝大会での初戦突破を達成することがで

きました。

来年度はさらに全国大会への進出へと繋げていこうと、日々の稽古に励んでおります。

また稽古以外でも、遠征や親睦会による他大学との交流などがあり、非常に充実した活動を行っています。

陸上部

陸上競技部活動実績

全日本薬学生対抗陸上競技大会(2013年5月)

男子110mハードル	1位	川端崇義
男子400m	1位	川端崇義
男子円盤投	3位	光岡諒介
女子走高跳	3位	辻井理紗
女子100m	3位	山口初美
女子200m	1位	山口初美
女子400m	1位	山口初美
女子800m	1位	山口初美
女子3000m	1位	山口初美
女子4×100mリレー	優勝	
女子総合の部	優勝	
女子トラックの部	優勝	
女子フィールドの部	準優勝	
男女総合の部	優勝	
女子	MVP	山口初美

関西医歯薬学生対校陸上競技大会(2013年10月)

男子100m	8位	大川貴也
女子400m	2位	山口初美
女子800m	1位	山口初美
女子3000m	3位	山口初美

関西薬学生対抗陸上競技大会(2013年8月)

男子100m	2位	大川貴也
男子200m	1位	大川貴也
男子走幅跳	1位	上田拓
男子三段跳	3位	上田拓
男子円盤投	2位	安藤翔太
男子円盤投	3位	光岡諒介
女子100m	2位	山口初美
女子100m	3位	海川和
女子200m	2位	山口初美
女子200m	3位	富永真央
女子400m	2位	山口初美
女子400m	3位	富永真央
女子800m	1位	山口初美
女子3000m	1位	山口初美
女子走幅跳	2位	海川和
女子走幅跳	3位	田中千尋
女子走高跳	3位	辻井理紗
女子4×100mリレー	2位	
男子総合の部	2位	
女子総合の部	2位	
男女総合の部	3位	

〈活動予定〉

3月： 関西医歯薬合同合宿

5月：全日本薬学生対抗陸上競技大会

：関西医科学生抗陸上競技会

8月：関西薬学生対抗陸上競技会

10月：関西医歯薬対抗陸上競技会

その他各種競技会、記録会等に出場いたします。

コトバの「豆クイズ」（8ページ）の解答

① スウェーデン ② ベルギー ③ ポルトガル ④ トルコ
⑤ エジプト ⑥ フィリピン ⑦ ベトナム ⑧ メキシコ
⑨ ニューヨーク ⑩ ワシントン ⑪ ロンドン ⑫ オックスフォード
⑬ ケンブリッジ ⑭ ベルリン ⑮ サンフランシスコ ⑯ アムステルダム

※ ロンドンは「龍（竜）動」とも書きます。

2013年度後期試験等日程

教務課

シラバスにも一部掲載されているように、2013年度後期の試験等日程は別表のとおりです。

再試験受験手続が遅れる学生が、例年見受けられます。日程等（再試験手続の詳細は後日掲示で連絡します）よく確認しておいてください。

「再試験受験許可書・領収書」については、再試験を受験する際に必要です。手続後、再試験受験時まで紛失しないよう大切に保管してください。万が一紛失した場合は、教務課で再発行をしますので申し出てください。

≪後期試験等日程表≫

年次	試　験	試験期間	合格発表	受験手続日
6	薬学特別演習 本試験	1月 7日(火) 1月 8日(水)	1月20日(月)17:00～ 1月26日(日)24:00 Webによる公開	―
	薬学特別演習 再試験	2月 4日(火) 2月 5日(水)	卒業査定会[2/18(火)]後 成績通知書を配付	1/21(火)･1/22(水)
4	後期試験	1月 9日(木)～ 1月16日(木)	1月27日(月)17:00～ 2月 3日(月)24:00 Webによる公開	―
	後期再試験	2月 4日(火)～ 2月 7日(金)	2月14日(金)17:00～ 2月21日(金)24:00 Webによる公開	1/28(火)･1/29(水)*
	前･後期再試験Ⅱ	2月21日(金)～ 2月28日(金)	進級査定会[3/20(木)]後 成績通知書を配付	前期科目:1/28(火)･1/29(水)* 後期科目:2/17(月)･2/18(火)
	OSCE本試験	12月14日(土) 12月15日(日)	別途掲示告知	―
	OSCE追･再試験	3月 6日(木)	進級査定会[3/20(木)]後 成績通知書を配付	別途掲示告知
	CBT本試験	1月22日(水) 1月23日(木)	別途掲示告知	―
	CBT追･再試験	3月 4日(火)	進級査定会[3/20(木)]後 成績通知書を配付	別途掲示告知
1～3	後期試験	1月20日(月)～ 1月28日(火)	2月10日(月)17:00～ 2月21日(金)24:00 Webによる公開	―
	後期再試験	2月21日(金)～ 2月28日(金)	進級査定会[3/20(木)]後 成績通知書を配付	2/12(水)･2/13(木)

＊4年次前期再試験Ⅱと後期再試験の受験手続を同時に行なうので、該当者は注意してください。

2014年度 卒後教育講座　概要

生涯教育センター

開催日	①　10:00-11:30	②　12:45-14:15	③　14:30-16:00
2014年 5月18日 （日曜）	インクレチンの基礎と臨床 ～変貌する糖尿病治療～	在宅医療:薬剤師に必要な視点とスキル	炎症性腸疾患の内科治療
	教授・稲垣　暢也　先生	管理薬剤師・水野　正子　先生	副院長・辻川　知之　先生
	京都大学　大学院医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科学	大和新薬株式会社 チューリップ薬局平針店	独立行政法人　国立病院機構 東近江総合医療センター
2014年 6月22日 （日曜）	関節リウマチの薬物治療最前線	高齢化社会のなかでの漢方の意義	JSH2014; 新しい高血圧治療指針について
	教授・三森　経世　先生	理事長・中田　敬吾　先生	教授・中田　徹男　先生
	京都大学　大学院医学研究科 内科学講座　臨床免疫学	医療法人　聖光園　細野診療所	京都薬科大学　臨床薬理学分野
2014年 7月13日 （日曜）	骨粗鬆症の診断と治療	小児てんかん診療のTips	栄養療法の基礎知識 ～栄養管理とNutrition Support Team～
	院長・中村　孝志　先生	副部長・長村　敏生　先生	薬剤部長・室井　延之　先生
	独立行政法人　国立病院機構 京都医療センター	京都第二赤十字病院　小児科	赤穂市民病院　薬剤部

※ 詳細はホームページを参照：申込受付期間、プログラム内容等は変更される場合があります。

◆受付開始：9:00～　（注：受付は、当日講義開始10分前までにおすませください）

◆その他：お支払いされました受講料は、欠席またはキャンセルされた場合は、返金できませんのでご了承ください。欠席された方には、後日テキストを送付いたします。

◆注意事項：ご来学の際は、お車の駐車スペースがございませんので、公共の交通機関でお越しください。

◆認定単位：配付条件①～③に基づき、下記2種のうち、いずれか1種のみ選択配付
※共催：公益財団法人　日本薬剤師研修センター　（G01）　1日／計3単位
※後援：社団法人　京都府薬剤師会　（PINK21）　1日／計2.25単位
1日の講義時間：90分で1コマ ／ 90分×3コマ＝計270分
・条件①　G01及びPINK21の認定単位は、途中入場や途中退室した場合の認定単位の配付は無し
・条件②　G01認定単位は、90分で1単位の配付：1日／計3単位配付
・条件③　PINK21認定単位は、1日全て270分出席した場合のみ配付：1日／計2.25単位配付のみ
（90分毎での認定単位の配付は無し）

◆申込方法
2014年2月17日（月）～3月23日(日)までの申込受付期間で、①または②の方法でお申込み下さい。
① 右記URLアドレス「WEB申込フォーム」より申込み　http://skc.kyoto-phu.ac.jp/
② 電話にてお申込み：TEL 075-595-4677　(TEL受付時間 平日のみ 9:00～16:00)

◆問合せ先：京都薬科大学　生涯教育センター
・TEL：075-595-4677　(TEL受付時間 平日のみ 9:00～16:00)
・FAX：075-595-4683　(24時間受付)

第19回京都薬科大学公開講座報告

生涯教育センター

2013年11月9日（土）、躬行館T31講義室において、第19回京都薬科大学公開講座を開催いたしました。はじめに谷口生涯教育センター長の挨拶があり、その後、「ひんけつ」というテーマで、本学病態生理学分野の芦原英司教授による講演が行われました。「ひんけつ」といった症状には、たくさんの病気が隠れており、それぞれの病気に適した指導、治療が必要であることについてわかりやすく説明が行われ、71名の参加者は、熱心に耳を傾けていました。

その後、場所を体育館に移し、健康科学分野、武田病院及びキリン堂のスタッフによる「健康度チェック」や「くすりの相談」「漢方薬の相談」、本学の教員による「健康相談」のコーナーが設けられ、152名の参加がありました。展示コーナーでは、生薬学分野の協力による薬草に関するポスターを展示し、薬草ガイドブックを配布しました。

例年同様、健康度チェックでは順番待ちのコーナーも出ていましたが、参加者は各コーナーを巡回しスタッフの熱心な説明に聞き入るなど大変好評でした。また、本学キャンパスでの開催も16回目となり、「毎年、薬大の公開講座に参加している」「参加して良かった」といった感想が多く聞かれ、地域に開かれた大学として、地域に定着してきたことが感じられました。

芦原教授による講演の様子

健康度チェック

受　賞

第63回日本薬学会近畿支部大会においてポスター賞受賞

2013年10月12日に同志社女子大学で開催された「第63回日本薬学会近畿支部大会」において、本学の学生6名がポスター賞を受賞しました。

所属分野：薬品物理化学分野
受賞者：4年次生　鄭 賢卿
演題：細胞間隙開裂ペプチドを表面提示した柔軟な構造を有するsiRNAキャリアー:AT1002による積極的な細胞間隙侵入
演者：鄭 賢卿、宇野 晃平、島谷 悠里、濵 進、小暮 健太朗

所属分野：薬理学分野
受賞者：4年次生　遠藤 京子
演題：酸感受性カリウムチャネル選択的スプライシング変異体の機能的役割
演者：遠藤 京子、黒川 なつ美、石井 瑞紀、中倉 佐和、藤井 正徳、奈邉 健、大矢 進

所属分野：微生物・感染制御学分野
受賞者：6年次生　松本 ゆき子
演題：*Pseudomonas aeruginosa* elastaseによる自己溶菌機構
演者：松本 ゆき子、石畑 茉亜子、皆川 周、後藤 直正

所属分野：薬剤学分野
受賞者：6年次生　山下 修吾
演題：アレンドロネート修飾を利用した骨ターゲティング型高分子キャリアの開発：メトトレキサートの骨移行性の改善と骨転移抑制
演者：山下 修吾、勝見 英正、森 久美恵、渡邊 早由里、坂根 稔康、山本 昌

所属分野：衛生化学分野
受賞者：5年次生　生川 晃子
演題：ラット味蕾のⅡ型及びⅢ型味細胞における亜鉛トランスポータZnT3の発現解析
演者：生川 晃子、久保田 晃代、松本 沙希、藪 美晴、小西 一誠、田中 美早、西田 健太朗、長澤 一樹

所属分野：代謝分析学分野
受賞者：6年次生　矢吹 夏奈
演題：配位様式の違いによる亜鉛錯体の消化管吸収性の変化
演者：矢吹 夏奈、内藤 行喜、家原 由貴、吉川 豊、安井 裕之

日本生物高分子学会2013年度大会において優秀発表賞受賞

2013年10月20日（日）に常翔学園にて開催された「日本生物高分子学会2013年度大会」において、細胞生物学分野の博士後期課程1年次生 重見善平さんが優秀発表賞を受賞しました。

受賞者：博士後期課程1年次生 重見 善平
演題：小胞体ストレス誘導剤Diallyl trisulfideのウイルス感染性リンパ腫に対する抗腫瘍活性
演者：重見 善平、賀川 裕貴、渡部 匡史、藤室 雅弘

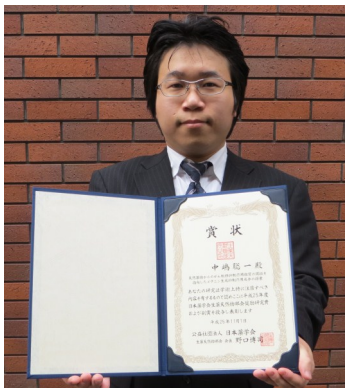
日本薬学会生薬天然物部会奨励研究賞受賞

生薬学分野の中嶋聡一研究員が平成25年度日本薬学会生薬天然物部会奨励研究賞を受賞しました。

本受賞は、『天然薬物からのがん転移抑制作用物質の開拓を指向したメラニン生成抑制作用成分の探索研究』が評価されたものです。

2013年11月1日に授与式および受賞講演が行われました。

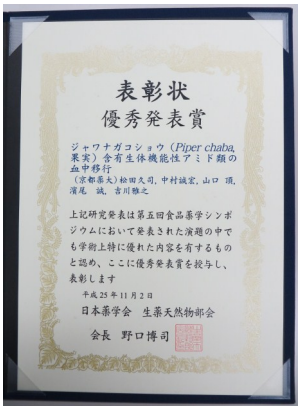
受賞者：研究員　中嶋 聡一
演題：天然薬物からのがん転移抑制作用物質の開拓を指向したメラニン生成抑制作用成分の探索研究



第5回食品薬学シンポジウムにおいて優秀発表賞受賞

2013年11月1日、2日に京都大学にて行われた第5回食品薬学シンポジウムにおいて生薬学分野の松田久司教授が優秀発表賞を受賞しました。本受賞は、ジャワナガコショウ含有生体機能性アミド類の血中移行に関する研究が評価されたものです。

受賞者：教授　松田 久司
演題：ジャワナガコショウ（*Piper chaba*、果実）含有生体機能性アミド類の血中移行
演者：松田 久司、中村 誠宏、山口 頂、濱尾 誠、吉川 雅之


表彰状
優秀発表賞
ジャワナガコショウ（Piper chaba, 果実）含有生体機能性アミド類の血中移行
（京都薬大）松田久司, 中村誠宏, 山口 頂, 濱尾 誠, 吉川雅之
上記研究発表は第五回食品薬学シンポジウムにおいて発表された演題の中でも学術上特に優れた内容を有するものと認め、ここに優秀発表賞を授与し、表彰します
平成25年11月2日
日本薬学会 生薬天然物部会
会長 野口博司

第23回アンチセンスシンポジウムにおいて奨励賞（川原賞）受賞

2013年11月28日～29日に徳島大学にて開催された「第23回アンチセンスシンポジウム」において、薬品物理化学分野の博士後期課程3年次生 池田義人さんが奨励賞（川原賞）を受賞しました。

受賞者：博士後期課程3年次生 池田 義人
演題：脂肪細胞に対するsiRNA導入によるアディポカイン“レジスチン”の機能解析とメタボリックシンドローム治療への展望
演者：池田 義人、土谷 博之（University of Utah School of Medicine）、濵 進、梶本 和昭（北海道大学大学院薬学研究院）、小暮 健太朗

左から二人目が池田義人さん

掲　載

週刊東洋経済「本当に強い大学」の就職率ランキング(理系ベスト100)において本学が3位にランキングされました

東洋経済新報社発行2013年11月2日【特大号】週刊東洋経済「本当に強い大学～日本の大学トップ300～」において、就職率(理系ベスト100)では第3位（昨年4位）、総合ランキングでは第30位（昨年42位）に本学がランキングされました。ランキングの詳細は本学ホームページをご覧ください。

薬化学分野の橋本准教授のコメントが日本経済新聞に掲載されました

毒キノコ 見分け方 俗説に注意

毎年300人前後中毒

主な20種、覚えて回避

色と直接関係なし 塩漬けも通用せず

日本の主な毒キノコ

2013年9月15日（日）　日本経済新聞

お　知　ら　せ

2013年度動物慰霊祭

10月23日（水）に、本校地の動物慰霊碑前において、2013年度動物慰霊祭を執り行いました。

当日は、当麻寺の増田宗雄住職をお迎えし、読経をいただきました。

雨が激しく降る中、武田理事長、乾学長、山本バイオサイエンス研究センター長をはじめ職員、多くの学生が次々と焼香をし、日頃教育・研究に貢献をした多くの動物達に感謝と慰霊の念をこめて冥福を祈りました。

人　事

昇任

薬学教育系教育研究総合ｾﾝﾀｰ
薬学教育研究ｾﾝﾀｰ　教　授　細井　信造
創薬科学系生薬学分野　准教授　中村　誠宏
病態薬科学系薬物治療学分野　講　師　天ケ瀬紀久子
事務局進路支援課長　岩澤　伸裕
事務局学生課長　井本富美代
事務局企画・広報課　課長補佐　川勝　章広
事務局教務課　係　長　近藤　利彦
事務局庶務課　係　長　栗田　晃
事務局学生課　主　査　加納　良章
（以上　2013.10.1付）

任命

事務局企画・広報課長代理　課長補佐　川勝　章広
（2013.10.1付）

採用

事務局学生課　事務員　夜船　宏哉
（2013.10.1付）
薬用植物園　契約職員　宮本　水文
（2013.12.1付）
病態薬科学系薬物治療学分野　助教　松本健次郎
（2014.1.1付）

配置換

参事（図書館担当）　松田　敏
事務局庶務課（前　事務局学生課）係長　平　薫
事務局教務課（前　事務局庶務課）主事　津岡　実穂
事務局進路支援課（前　事務局教務課）
主事　増村　友美
（以上　2013.10.1付）

事務局企画・広報課長事務取扱及び
事務局学生課長事務取扱を解く
事務局次長　松田　敏
（2013.9.30付）

京 薬 会 だ よ り

＜ホームカミングデーの開催＞

本年も母校の京薬祭にあわせて11月4日（月・振替休日）に第4回ホームカミングデーを開催しました。当日は躬行館講義室において歓迎セレモニー、ならびに講演会を行い、その後躬行館食堂においてパーティーを開催しました。今年も参加者が100人を超え、恒例行事として定着してきた感があります。

歓迎セレモニーにおいてはまず西野京薬会会長、武田京都薬科大学理事長ならびに佐藤学生自治会会長の歓迎挨拶があり、引き続き乾学長より京都薬科大学の近況として国家試験の結果、進路状況の紹介に続き、グローバルなファーマシスト・サイエンティストの育成やナンバーワンを目指した種々の取り組みについて紹介がありました。

今年の講演会には日本薬剤師会会長 児玉孝氏（本学昭和45年卒）をお招きし、薬務行政の現在の状況、薬剤師の現在担っている役割や、それに対する日本薬剤師会の取り組み、そして薬剤師の将来像に至るまで詳細に解説いただきました。

会場を移して行われた歓迎パーティーでは京薬会河野副会長の乾杯のご発声ではじまり、受付時に参加者にお配りした金券を使って学生の出張販売を購入したり、また、模擬店に繰り出したりと、卒業生同士また、卒業生と在学生の交歓が随所に見られ、非常に和やかな会となりました。なお、お配りした金券は各クラブ、サークルに現金として還元し、活動の援助を行っております。

このように年々盛会となっておりますが、来年もまた新しい企画を用意し、11月初旬の京薬祭に合わせて開催しますので、お誘いあわせの上すっかり生まれ変わった母校にお越しください。卒業生の皆さんの多数の参加をお待ちしています

＜優秀クラブ表彰と特別表彰＞

今年も11月3、4日の両日、「palette　キセキを生み出す化学反応」をテーマに京薬祭が開催され、中庭のプラクティテラス特設ステージの催し、ステージ前の中庭での模擬店と夜遅くまでにぎわいました。

京薬祭のオープニングにあわせ、恒例の京薬会によるクラブ表彰が行われました。今年は優秀クラブとしてヨット部、バドミントン部、剣道部が選ばれ、西野会長より副賞を添えて表彰しました。さらに、クラブではありませんがダンスサークル「京躍華」を平安神宮で開催された京都学生祭典での優秀な成績に加え、日ごろの地域清掃や震災被災地でのボランティア活動などにより、特別表彰しました。

京都薬科大学奨学寄附金芳名録

下記の方々からご寄附をお寄せいただきました。ご協力ありがとうございました。

＊ 高額のご寄附（10万円以上）を頂いた方は、京都薬科大学奨学金規則及び学生便覧に掲載させて頂きます。

＊ 敬称略、芳名のみ掲載しております。

2013年9月～2013年11月にご寄附をお寄せいただいた方々

〈卒業生・同期会等〉

（卒業年次順）

森　　博直(昭24)　　岡　カヅ子(昭38)　　新井　理恵(昭55)　　加藤由美子(昭61)
米谷　英資(昭29)　　高木　正行(昭51)　　古村　光嗣(昭56)

〈法人役員・評議員・職員〉

（五十音順）

乾　　賢一(学　長)　　土田　花美(係　長)　　山岸　伸行(准教授)

（2013年11月30日現在）